接続詞

――源氏物語を中心に文末語との関連性を考える――

今西浩子

一

こと新しく指摘するまでもなく、『谷崎源氏』では原文に接続詞の見られない個所で、多くの接続詞の使われていることがめだつ。[注1] それは特に文と文とを結ぶ接続詞について多い。勿論、口語訳である為だということもあろう。また谷崎氏自身の文体ゆえだという理由も成り立つかもしれない。しかし、谷崎氏自身、実は接続詞を多く用いることを好まない作家であるらしい。[注2] その上、中村真一郎氏や大岡昇平氏のいう、

もうひとつの名訳である谷崎潤一郎氏のものは、これは作者自身の陰翳美学によって、現代語で可能なかぎり原文の曲折を追おうとしており、それは与謝野訳とは正反対の行き方である。つまり、谷崎訳は王朝物語として『源氏物語』を再生しようと努力しているのであり……（傍点筆者、河出書房新社『源氏物語』解説）

谷崎潤一郎の文章は、もともと美文系に属し、疵がないのが玉に疵といった種類のものですが、かんでふくめるような平明な文章から、説明と敬語とを取ってしまうと、あとには源氏の簡潔な原文が残るということになっているのは皮肉です。源氏物語には文体があるが谷崎源氏にはそれがないからです。（傍点筆者、『現代小説作法』）

といった批評などが『谷崎源氏』の一性格を突いたものであるという観点に立つならばなおさらのこと、『谷崎源氏』に接続詞の多いのは、単に注釈や個人の文体の問題ではないと言わねばなるまい。それは明らかに、文語文と口語文とで異なる文脈の生みだしたものとみなければならない性質のものである。

文語文と口語文とでは文脈が異なるということに関して思い起すことがある。それは、物集高見がその言文一致運動主唱の際に、「話しと、文章のちがひどころ」と題して、

私が目には、おもに、二つ所がちがう(ママ)様に、見えます。よりて、其ふたところを、書き直して、見ますれば、千年、むかしのも、五百年、むかしのも、ことばこそちがへ、脈は、今の脈に、なりまして、誰れでも、ぢきにわかる様に、なります。其ふたところと、いふは、時の所と、接続の所とで、ありますが、此外にも、てにをはを省くことが、あり、名詞の、位置をかへねばならぬ様な所も、それは、ありますが、先づおもなる所は、時と、接続との、工合であります。(傍点筆者)

といったことを述べ、更に

中古の物語本と近世の講談本とに就きて、其の接続詞と時の辞とを入れかへて試みたりしに、物語本の口調は、全く、今の世話(せわ)の如く聞え、講談本は、却て、雅文の如く聞きなされしより、さては、言文を二途(と)にせるは、接続詞と時の辞との為なりと思ひなりて、(傍点筆者、引用文はいずれも、山本正秀『近代文体発生の史的研究』による)。

と述べていることである。この中での「時の辞」と「接続詞」はこのまま文字通りのものを意味するわけではなく、前者は助動詞に相当し、後者は接続詞及び接続助詞を意味しているようである。[注3] 物集は更に、以上の見解に基づいて平安時代から室町時代に及ぶ代表的な古典について、それぞれの古文を明治の口語仕立ての新文章に書き改めているが、ここで注目されるのは、接続助詞の問題もさることながら、文末の助動詞を変えると、次の文頭に「それは」といった指示語——と言っても広義での接続詞としての——を盛んに置いていることである。このことを逆に考えるならば、『谷崎源氏』に多い、文と文とを結ぶ接続詞は、文語と異なる口語の文末助動詞に左右されたものではないか、という推測ができる。

右の推測を念頭に置いて改めて我々周辺の文章に眼をむけてみると、そこでもいくつかの興味ある現象にぶつかる。例えば、子供の文章中には、「そして」「それから」といった指示語系統の接続詞がめだつが、その子供の文章の大半は「です・ます体」で書かれている。つまり「です・ます」といった特定の文末助動詞があるために接続詞を必要とする、ということも考えられるのではなかろうか。また、このことは必ずしも子供の文章に限るわけではない。我々でさえ、

a 朝七時に目をさます。顔を洗い、すぐに飛び出す。やっとのことで遅刻からまぬがれる。

b 朝七時に目をさまします。顔を洗い、すぐに飛び出します。やっとのことで遅刻からまぬがれます。

といった二つの文章を与えられた場合に、文と文との間に「それから」「そして」などの接続詞を挿入したくなる感じはbの文章の方がより強いことを知るであろう。

そうすると、文末助動詞と接続詞との関係は、必ずしも物集や谷

崎にみる通時論の問題としてだけでなく、共時論の問題としても考えるべきことが多くあるのではなかろうか。但し、ここで通時論と共時論とを混同することは避けなければならない。それ故に本稿では、まず共時論の立場からこのことを検討してみようと思う。その際に、この文末助動詞の枠を広げて文末の単語として考えてみるとどのようになるであろう。また接続詞の方も指示語系統に限らないで学校文法で扱うところのいわゆる接続詞一般を考えてみた場合にどうなるのであろう、その場合に果して一定の文末語と接続詞との間に関連性があるものであろうか、といった問題が浮び上ってくる。枠をゆるめた所で考察を進め、そのために該当しないものが出てくるならば、その時改めて接続詞、文末語ともにその範囲を規定していけばよい、というのが稿を進めていくに当っての筆者の基本的な態度である。

なお、この共時論での考察を近代語――古代語に対するもので現代語をも含む――で行なう方が、今までの稿の成りゆきからも、よいようにみられるかもしれないが、近代語には、文末語と接続詞、口語文と接続詞といった二要素が入り混じるために、文末語と接続詞との関連性を一元的に考えるには、古代語で考える方が適切に思える。それ故さし当っては、『源氏』の本文についての文末語と接続詞との結びつきを検討することを本稿の目的とする。[注4]『源氏』を選んだのは特別の意味があったわけではない。もし文末語と接続詞との間に本来的に関連性があるのならば、『源氏』にもそれがみられるはずであり、資料として大きいことなどの理由による。やや積極的には、日本の文章史上第一に置くに足りる作品だと考えるからである。

〈注〉

1 谷崎源氏に接続詞の多いことを論文で指摘したものには、池上禎造氏の「中古文と接続詞」(『国語国文』15・12)がある。

2 『文章読本』にうかがえる。前出「中古文と接続詞」には『文章読本』を引用しての指摘がある。

3 山本氏は、物集のいう「接続詞」を「接続助詞及びその省略」と注釈されているが、引用例によると接続詞も含まれている。

4 文末語を助動詞だけに限定しないことは前述した通りである。接続詞も、さし当っては『源氏』の中に含まれるいわゆる接続詞として扱われるものすべてを対象とした。所詮、接続詞は指示語、副詞からの転成であるが、明らかに副詞と思われる「また」の類や、前文中の特定語をはっきりとうける指示語は接続詞と区別して調査対象からはずした。

二の一

『源氏』本文の文末語をみると、補助用言の「たまふ」で終っている文が最も多く、凡そ二千四百三例ある。その中で接続詞の後続[注1]するものは三十一例みられる。次いで多いのが「けり」で終止している文で、一千四百七十二例、うち接続詞後続四十四例をみる。[注2]もしここで、文末語と後続接続詞との間に全く関連性がないものとするならば、頻度数が「けり」終止の二倍近くある「たまふ」終止の文に接続詞の後続も多いのが、組合せの論理からいって自然なわけであるが、事実はそうでない。やはり接続詞は「たまふ」より「けり」との結びつきが密であるとみなされるべきであろう。[注3]

しかし、この両文末語の間に後続接続詞との関連性の上で粗密があるとしても、ここからただちに一定の文末語と接続詞との関連性を論じることは出来ない。「けり」一語をもって「一定の文末語」と言えるほどには文末語の数も少なくないからである。そこで、もう少し文末語一つ一つについての検討を続けていく必要があるわけだが、雑然と数多い文末語間での検討は、やはり文末語を品詞別にみていくのが最も整理しやすく思われるので、以下ではこの方法を採用する。

まず、文末語が用言である場合、それを用言の各品詞別にして、それと後続接続詞との関係をみてみると次表のような結果になる。

I 表

	文末語全用例数	接続詞後続用例数
形容動詞	63	3
形容詞	853	19
動詞	2440	44

I 表からは、頻度数の多い文末語に接続詞後続も多く、少ない文末語に接続詞後続も少ない、といった程度のことしか読みとれず、各品詞間にはなんら特徴が見出されないのであるが、この三品詞をI′表の如く形状性用言と作用性用言の二分類に組み直してみると、[注4]形状性用言の方に接続詞は後続しやすいという傾向が明らかになる。

I′表

	文末語全用例数	接続詞後続用例数
形状性用言	1159	43
作用性用言	2197	23

これに同じことを助動詞についても調べ、その結果を示したのが次表である。

ここでA列は『源氏』における文末助動詞を頻度の高い順に並べたもので、その中、接続詞の後続している文末語を頻度の高い順に並べたのがB列である。[注5]このA、B間の出入りを見ようというわけであるが、この表の下方は非常に少数例になっており、その上、用例収集時の見落しなどからくる誤差などを考えると、そこから傾向を云々することは、はなはだ危険だと言わねばなるまい。そこで上から六個の助動詞に限って考察を進めていくことにする。[注6]

Ⅱ 表

B(例数)	A(例数)	
けり (44)	けり (1472)	1
なり(断定) (28)	なり(断定) (919)	2
む (22)	り (913)	3
めり (19)	たり (724)	4
べし (14)	ず (715)	5
ず (13)	む (711)	6
ぬ (10)	ぬ (563)	7
き (8)	べし (395)	8
まし・り (7)	めり (293)	9
たり・けむ(らる) (6)	る (215)	10
つ (4)	き (202)	11
らむ (3)	つ (171)	12
じ (2)	じ (108)	13
まじ (1)	けむ (107)	14
まほし (1)	らむ (92)	15
	す(さす) (86)	16
	まし (51)	17
	まほし (18)	18
	まじ (16)	19
	(け)らし (1)	20

まずA列で六番目までに入っている「り」「たり」がB列では下方にさがり、反対に、A列

では下方にあった「べし」「めり」などは、B列では共に六番目までの中に入っている。これらは特に動きの大きなものであるが、その他の「けり」「なり」「む」「ず」にしても「めり」「べし」同様に、B列の数がA列の数の三〜四%ぐらいに当っており、「たり」「り」のそれは各々〇・九%、〇・七%、と極端に少なくなっている。だとすれば、やはりある種の助動詞は接続詞との関連性が密であると言えるのではなかろうか。[注7]

次に助詞について同様の作業を続けてみる。その結果は次表の如くである。

Ⅲ表

B	A	
かし	や(は)	1
や(は)	なむ	2
なむ	かし	3
かな	かな	4
よ	よ	5
ぞ	か(は)	6
こそ	ぞ	7
な	な	8
な〜そ	こそ	9
ばや	な〜そ	10
	ばや	11
	がな	12
	だに	13

ここでA、Bの符号は先の助動詞の場合に準じるが、助詞は用例数が少ない上、出入りの幅が小さいので、「かし」と接続詞の関連性が密に思われること以外には、この表から如何とも判定し難い。[注8]

次に格助詞の「と」が続き、そこに接続詞の続く可能性を含まないものはとらない。

3　まずこのような方法をとったのは、『源氏』においても文末語と接続詞との間に関連性があるか否かの大筋をつかむために、最も多い文末語で把握してみるのがよいと考えたからであるが、そこに「たまふ」「けり」といった性格の異なる語が出てきた為に比較出来たのであって、これが同性格の二語であれば比較にならなかったであろう。

またこの場合、関連性ということに科学的な根拠をもたせようと、我々はすぐに相関々係という言葉を安易に使い、相関係数を出したくなる。だが厳密な意味での相関々係は、変量XYについていえるもので、文末語、接続詞とも変量としては扱っていないから、相関係数を出すことは出来ない。この点、筆者が以前口頭発表した際に相関性という語を不注意に使ったことを訂正しなければならない。

なお別に、「けり」と「たまふ」との間に後続接続詞による差がある、と言いきることの信頼性を調べる方法にカイ二乗検定がある。(これについては樺島氏の『統計調査法入門』に詳しい)。ここでのそれは、自由度=1, $\chi^2=14.6$ となり、危険率一%以下で右記のことが信頼できる。

4　自由度=1, $\chi^2=29.197$ となり、危険率一%以下で「作用性用言」と「形状性用言」の間に後続接続詞による差がある、ということが信頼できる。

5　補助用言の「たまふ」「はべり」は対象からはずした。

6　こういった場合、どこで切るかには、かなり主観の入ること

〈注〉

1　但し、前文が地の文で後続文が対話文、歌、といった形態の異なる文の間でのものは含まない。

2　本稿の調査は『日本古典文学大系』本による。文末の識別はこの本の句点を基準に考えたが、多少、筆者自身の判断によって変えたところもある。また、対話文、心理描写文の終りなどで、

を免れない。本稿の場合には細かい実測値の出入りよりも、順位の出入りで大きな動きを知ることに主眼を置いたため、A列、B列とも同位になる第七位の「ぬ」を基準に六位までで考えた。

7　ここで参考までに、大系本で校注者によって接続詞が本文傍に挿入されている場合の、前文文末語の頻度順を次に示す。

り	(127)	1
り	(68)	2
む	(66)	3
ず	(57)	4
し	(46)	5
り	(38)	6
り	(35)	7
り	(31)	8
き	(28)	9
ぬ	(25)	10
む	(20)	11
る	(19)	12
つ	(18)	13
む	(14)	14
じ	(9)	15
し	(6)	16
す(さす)	(3)	17

これは注として記入されたものであるから、多いめに接続詞が補われていることもあろうし、平安時代と現代との、あるいは紫式部と校注者との感覚の相違があることなどは十分に警戒しなければならないが、同一文章に対して接続詞が使いたくなるという個所の傾向は、ある程度出るものとみてよいのではなかろうか。そして右表がⅡ表B列と傾向を同じくすることは、B列がその実測数は小さくとも、まぐれの順序でないことを示すことにはならないだろうか。

またこれも、A列の上から七番目までを実測値によってカイ二乗検定すると。

自由度＝1, $\chi^2=26.375$ となって、各助動詞間には後続接続詞による差のあることが危険率一％以下の信頼度で言えることになる。

8　前出の校注者挿入の接続詞を考えると、その文末語頻度順は次のようになる。

し	1
む	2
(は)	3
な	4
よ	5
(は)	6
ぞ	7
や	8
そ	9
な	10
も	11

ここでも「かし」が最上位に上ったことはⅢ表B列と同じであるが、その他は如何とも判断できない。

「や(は)」「なむ」「かし」の三者について後続接続詞による差があるか否かをカイ二乗検定すると、自由度＝2, $\chi^2=5.808$ になり、これは五％以上の危険率を持って差のあることが成り立つ。

二の二

先に断ったように、前章までのところでは、いわゆる接続詞をすべて一様に扱ってその細かい規定は怠ってきた。しかし、その中でも更に、一定の文末語と接続詞との結びつきは密であるかもしれないということも予想されるのである。

次の表は『源氏』の中で頻度二十以上の接続詞と、頻度十六以上の文末語との関係を示したものである。

この表でみると、「けり」より「たまふ」により多く後続している接続詞は、「また」と「さて」になる。更に、この表中の「されども」「かくて」などは、『源氏』における「されども」「かくて」——あくまで文と文とを結ぶ接続詞であることには変りない——などの全用例中、約半数がこの表に記した頻度十六以上の文末語に後続しているものであるのに対して、「また」「さて」の大部分は、この表に示されていない文末語、換言するならば頻度十五以下のものに後続していることになる。それだけ「また」「さて」の方が、直

Ⅳ 表

接続詞／文末語	また	されども	さては	さるは	かくて	さりとて	さりとも
け り	3	8	3	13	6	1	0
たまふ	7	5	5	3	2	0	0
な り	6	9	1	3	2	1	1
か し	2	7	5	0	2	1	1
む	3	5	5	0	0	3	2
あ り	10	2	1	0	2	0	0
な む	2	1	3	4	0	0	0
や	3	4	1	0	0	2	3
計	36	41	24	23	14	8	7
文末後続接続詞総数	84	78	68	48	24	21	20

前の文末語が変化に富み、したがって一定の文末語との結びつきが粗であるということにもなろうか。[注1] 表中の計が総数の半数以下であるという点では「さるは」「さりとて」「さりとも」とても同様であるが、後二者はその用例数が少ないので一応除外して考えてもよいのではなかろうか。すると「また」「さて」「さるは」が問題である。

ところで、この「また」を除くと、そこに残る接続詞はいずれも「さ」「かく」といった指示語を頭にもつ接続詞である。しかし同じ指示語系統の接続詞ではあっても、「さて」「さるは」等は話題転換の機能がきわめて強く、その指示性はきわめて薄いと言える。すると指示機能をはっきり持つ接続詞ほど、ある一定の文末語と結びつきが密であると言えるのではなかろうか。[注2]

〈注〉

1 このことを、前出の古典文学大系本に挿入された接続詞についてみると次のようになって、本論の場合と同様の傾向がみられる。

接続詞／文末語	されど	されば	また	しかるに
け り	37	37	8	18
たまふ	26	11	25	4
な り	17	17	11	8
か し	7	7	2	5
む	19	10	8	8
あ り	5	5	6	1
な む	9	6	1	1
や	6	5	1	2
べ し	13	6	5	9
め り	15	11	3	6
計	154	115	70	62
総 数	304	293	210	171

2 以上はⅣ表を縦にみて接続詞の規定を行なったわけであるが、この接続詞には順接のものと逆接のものとが混っているから、文末語の各段を横にみると、接続詞の順逆が文末語との結びつきに関係しているかどうかが判定出来る。表は非常に出入りが多くてすっきりしないが、それでも大体、接続詞が後続しやすいとみた文末語には順接の接続詞も逆接の接続詞も後続しやすく、後続

しにくいとみた文末語には順逆いずれの接続詞も後続しにくいことが推察できる。よって接続詞の順逆は、少くとも一次的には関係しないものとみてよさそうである。

二の三

では、接続詞との結びつきが密な一定の文末語とは、どのような文末語なのであろうか。用言の場合には、形状性用言ということで一応の解答が与えられたようなものであるが、助動詞の場合は個々の助動詞に序列をつけたにとどまり、その間になんら有機的な関連を見出していない。

ところで、この助動詞の序列は次に示す橋本進吉博士の「助動詞相互承接」表と関係づけて考えることができる。

「助動詞相互承接」表　注1

	言用
1	ぬ り
2	*たり
3	つ
4	ず
5	べし まじ*
6	けり* めり*
7	き けむ らし らむ む まし じ

◎※をつけたものは再び上にもどることがある。
◎断定及び敬語の助動詞は省く

まず右の表で「り」は最上位にあり、「たり」は二位、「べし」は五位、「めり」は六位、といった具合であるが、それは表ⅡのA列で上方にあり、B列で下方になった助動詞がこの表では上位にあり、反対にA列で下方にあってB列で上方に上った助動詞がこの表では下位のものであることを意味する。また「けり」「ず」「む」など表ⅡA列で上方のものはいずれも右表で下位のものであることを考えるならば、この「助動詞相互承接」表で下位にある助動詞――それは文末の末端に位置しやすい助動詞だということになる――ほど接続詞との結びつきが密であるということにはならないだろうか。[注2] 助動詞とても、偶々表Ⅱにあるような順で接続詞と結びついたものでないことが、ここで確められたことになる。

因みにこの「助動詞相互承接」表は、陳述度を示すものとされ、この表で下位にある語ほど陳述度の高いことが渡辺実博士によって言われている。そうとするならば、陳述度の高い文末助動詞ほど接続詞が後続しやすいということにもなろうか。

なぜ接続詞の後続しやすいことと、陳述とが結びつくかについて、いま早急に結論を出すのは危険である。「助動詞相互承接」表に助詞を考慮するならば、それは七位の下に続くことになって、一層陳述度の高いものになるにもかかわらず、既にみてきた通り、接続詞との関係は必ずしも密とはいえない。が、いわゆる陳述の概念にほぼ相当するものとしてモドスという概念をもち出される芳賀綏氏の如きは、おおかたの助動詞のような、文の終止を担う要素の強いものを中核のモドスとし、「よ」「ね」「な」「や」「さ」「え」「い」といった終助詞の類を外郭のモドスとして区別することを試みられている。(『日本文法教室』) 佐治圭三氏も助詞についてだけではあるが、右の外郭のモドス、中核のモドスに対応する概念として各々聞き手めあての助詞（第一類）、と判断めあての助詞（第二類）との区別をしておられる。するとこれは、陳述が含みもつ一つの性格――それは文が終止したことを強く表わす要素、そこには判断といったことが多少とも含まれるのではないかと考えるが――と接続詞

との間の結びつきと言えるもののように思える。「相互承接」表から除外されている助動詞「なり」は、敢えてこの表中に入れるならば上位に位置するはずのものであるにもかかわらず、接続詞との結びつきが強いことも、右の見解をとれば納得がいくのではなかろうか。[注3]

〈注〉

1　本表は『解釈と鑑賞』S・38・6誌上に、渡辺博士によって紹介されたものによる。この表は、橋本進吉博士著作集には見えないが、著作集第七集「国文法体系論」一三四頁に次のような類似の記述が見られる。

一　助動詞は重なる事がある。それにはきまった順序がある。

（口語）――省略――

（文語）す　る　たし　り　ぬ　つ　ず　べし　まし　き　む
さす　らる　　たり　ざり　まじ　めり　けり　らむ
しむ　　　　　　　　　　　　　けむ

《□の印をつけたものからは、又返る事がある》

2　本稿では、文末語を文末の一単語としたが、他に文末辞全体にわたって、あるいは文節を考える立場もあるわけである。今回こういった処置をとったのは、特に『源氏』などでは「書かせたるならむかし」と辞が五個ぐらい重なる場合もあって、現象をなるべく単純化して考えるという現実的な意味もあってのことであるが、ここに示したように、接続詞が文末に位置しやすい助動詞ほど関連性を持ちやすいということは、古代語の助動詞に関する限り文末の一単語について考えてもよいのではなかろうか。しかし、「相互承接」表には敬語、断定の助動詞が省かれているし、助詞の問題もあるゆえ、今後、この文末語を文節、あるいは辞全体をとって考察する用意がないわけではない。もしそこで新たな現象が出れば、今回のものを是正するつもりである。

3　接続詞の後続しやすい文末語が地の文より対話文によく使われる文末語であることは、いずれの場合にも共通して言えそうである。助動詞にしてもⅡ表B列の順序がまた各々の助動詞の対話文中での頻度順とほとんど一致する。但しこのことは、実際の対話文中に接続詞が多いということにはならない。やはり対話文そのものが問題なのではなく、口語的な文体の問題である。すると、本稿の場合文末語と接続詞の関連性をできる限り一元的にみようと、意識して口語体を避けたのであるが、ここに至って、いわゆる口語というものの分析を別に行なう必要があることを痛感する。

三

それでは、こういった文末語と接続詞との関連性は『源氏』を出て果して言えるものであろうか。次表は平安時代の諸作品について、接続詞―一応指示語系統のもののみとりあげた―の後続している文末語をとりあげ、それらと接続詞後続との数を示したものである。[注1]

ここで『竹取』から『更級』までの各作品は、いずれも用例数が少ない為にあまりはっきりとした傾向をみることは出来ないが、それでもおよそのところ『源氏』の線に沿っていることがうかがえであろう。しかし、これが『今昔』になると、少くとも『源氏』と同様の傾向はみられない。この表でみる限り、『竹取』―『更級』の範囲においては『源氏』のことが適用できることになる。

作品＼後接続詞末語文	竹取物語	伊勢物語	土佐日記	蜻蛉日記	落窪物語	枕草子	和泉式部日記	紫式部日記	浜松中納言物語	更級日記	小計	今昔物語	計
作用性用言	1	2		1	7	8	1	1			28	423	451
形状性用言	3		4	8	5	12	3	4	2	1	42	400	442
けり	4	21	2	5	7	5	1	2	1		48	729	777
なり	3		1	1	1	4		2	2	1	15	341	356
む			1		1	6	1		3		12	58	70
ず	2	2			2	2			2		10	271	281
ぬ	2				3						9	223	232
つ				1	1	2					8	105	113
たり	1	1		1	1	2		1			7	118	125
り					6		1				7	89	96
めり	1			3	1	1					7	6	13
べし			1	2	1			1	1		6	63	69
けむ				1	1	1		1	1		5	15	20
らむ				3		2					5	7	12
き						3		1			4	55	59
る（らる）				1		1	1				3	6	9
す（さす）				1	1		1				3	6	9
まじ								1			1	0	1
ごとし											0	42	42
じ											0	21	21
しむ											0	18	18
ましし											0	7	7
かし					1	7	1	1	1		14	5	19
なむ				5	1				1		7	3	10
や（は）	1		1	1				1	1		6	31	37
か（は）			1		1						2	9	11
な				1					1		2	0	2
こそ					1						1	5	6
なーそ					1						1	2	3
ばや									1		1	0	1
かな									1		1	9	10
ぞ											0	5	5
や											0	3	3
計	18	26	16	49	44	51	10	16	18	2	255	3075	3330

ところで、筆者は先に「二の二」の補注で文末語のカイ二乗検定を行なっておいた。だがこれは、あくまで『源氏』一作品で考える限りにおいては、実は必要のないことである。なぜならば、偶然ということは、母集団からの無作為抽出による標本のもとで話を進め

る場合に起りうることで、一作品に限定し、しかもその一作品のすべての用例でもって話を進める場合には、歴然たる事実が存在するのみで、偶然ということはありえないからである。また、カイ二乗検定そのものは、標本抽出されたものの信頼性を計算する式でもある。先のカイ二乗検定が、助詞の場合を除いて、一定の文末語と後続接続詞との関連性は危険率一%以下で信頼できるとの結果に出たことは、『源氏』での傾向が、もし『源氏』がある母集団の標本になっているとの前提に立つならば、かなりの信頼性をもっていえることを、はからずも証明したことになる。要は『源氏』がどのような集団を代表しているかである。『竹取』―『更級』がその一部であるとしても、母集団の全貌は改めて別の方法で調べなければならない。

本稿は、接続詞を指示語系統の限られたものと規定するならば、『源氏』において、この接続詞と一定の文末語との間には関連性があり、それは『源氏』を標本にもつ母集団の中でも通用することが言えたことを以て目的を達したものと考える。これはあくまで文末語と接続詞との関連性を方向づける一階梯のものにすぎない。文末語や接続詞の規定にしても、材料不足や方法上の欠陥から十分なものになっているとは思えない。こういった点は今後の再考を要するが、ともかく、この方向づけがなされれば、次の段階では『源氏』を標本とする母集団を見出すことと、他の母集団――例えば『源氏』を和文系の文章と仮定するならば漢文系の文章は、といったこと――ではどうなるかを調べることが課題である。もし今後更に、共時的にも通時的にもこの問題が体系づけられるならば、あるいは接続詞の発達論へ言及することも可能になるのではなかろうか。

〈注〉

1　本表の資料は次のものによる。竹取物語↓竹取物語総索引、伊勢物語↓日本古典文学大系、土佐日記↓日本古典文学大系、蜻蛉日記↓かげろふ日記総索引、落窪物語↓日本古典文学大系、枕草子↓日本古典全書、和泉式部日記↓和泉式部日記総索引、紫式部日記↓岩波文庫・紫式部日記用語索引、浜松中納言物語↓浜松中納言物語総索引、更級日記↓更級日記総索引、今昔物語↓日本古典文学大系。

〔付記〕　本稿中の実測値で口頭発表のものと異なるものは、その後訂正したものである。

本稿は修士論文の一部を、国語学会で発表した原稿に基づいて書き改めたものである。遠藤嘉基先生をはじめ、修論の試問に当っていただいた京大の諸先生方や、池上禎造先生、宮地裕氏など多くの方々から御教示をいただきました。ここに御礼申し上げます。

―昭和学院短期大学講師―